

Seminar

限界・成長・熟達を問い直す—スポーツと医療者教育のクロストーク—

日時：2026 年 6 月 6 日（土） 13：00 ～ 14：30

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟 国際会議室

企画：岐阜大学医学教育開発研究センター（岐阜大学 MEDC）

講師：為末大（東京大学先端科学技術研究センター）

司会：宮地由佳（岐阜大学 MEDC）

クロストーク：西城卓也（岐阜大学 MEDC）、梶晃太郎（岐阜大学教学事務部）

対象

医療者教育関係者（医療系大学の教員、医療機関で勤務する指導者、医療系大学の事務職員）。

を残し、何を手放し、どう人と関わるかを問い直す機会とした。

概要

医療現場・医学教育では、働き方改革による時間制約、教育・指導負担の増大、学習者のモチベーションや成長実感の希薄化など、複合的な課題が顕在化している。本セミナーでは、「人はどのように成長し、熟達していくのか」という問いを軸に、為末大氏を招き、トップアスリートとしての経験と引退後の研究・実践をもとにご講演いただいた。熟達を技術の向上だけでなく、人間理解、メタ認知、倫理観を含む人格の成熟との相互作用として捉え、AI 時代の身体性、指導における言葉、専門性を越えた対話、アンラーン（学びほぐし）と未熟さを残すことの意義が論じられた。後半は医療者教育・職員育成の文脈からクロストークと会場質疑を行い、スポーツと医療者教育を往還しながら、これからの人材育成のあり方を考えた。単一の正解を提示するのではなく、異分野の経験知を手がかりに、現場で何

報告概略

1. 開催・参加状況

本企画は、「第 92 回医学教育セミナーとワークショップ」および「第 27 回医学部・歯学部教務事務職員研修」の一企画として対面開催した。会場では、医学教育に携わる大学教員、医療機関の指導者、大学事務職員等が講演と対話に参加し、医学教育担当者や初期研修担当者からも発言・質問が寄せられた。

2. 基調講演の内容

為末氏は、18 歳以降コーチを置かず個人で競技を続けた経験や、記録という数値によって成長と限界を突きつけられる陸上競技の特性を起点に、「熟達とは何か」を問い直した。

熟達は「技術」と「人格」の両輪

熟達は技術だけでは完結せず、いざという場面で力を発揮するには、その人の在り方も関わるとされた。人格を支える要素として「人間を理解する力」「メタ認知」「倫理観」の 3 点が示され、とりわけ指導者からの外的なフィ

ードバックが、自分では気づきにくい癖や目的のすり替わりを捉えるメタ認知を支えると説明された。

AI 時代に残る身体性と経験

AI には物理的な空間における「位置」がなく、人間のような人生の始まりと終わり、失敗や悔しさとしての「傷」もないという対比から、身体をもって同じ場に居合わせることで、人生経験を通して得たものを人に伝えることの価値が強調された。技術が機械化されるほど、人間同士が直接向き合うコミュニケーションの技能が重要になるとの見通しが示された。為末氏は、今回の講演の焦点として、以下の3点を提示された。

1) 言葉を磨く

スポーツ指導のキューイングを例に、見えている動作をそのまま指示するのではなく、相手が生きてきた身体世界を想像し、「もしも」の情景や比喩によって自然な動きを引き出すことが紹介された。一方、長期的な信頼関係が形成されると、短い一言や身体接触に多くの意味を込められることから、言葉を尽くすことと、共通言語を育てることの双方が重要とされた。

2) 専門性を越えて翻訳する

人間そのものは分割できない一方、高度化した社会では専門家が領域ごとに分かれる。アスリート支援チームの例から、専門家同士が相手の言語や見ている世界を理解し、互いに翻訳しながら課題に向き合う必要性が示された。また、世代・職種・属性などのラベルで相手を早く処理しすぎず、「その人」をよく見ることが対話の前提になると述べられた。

3) 未熟さを残し、アンラーンする

熟達によってアウトプットが安定することは、同時に既存のやり方への固定化にもなり得る。為末氏は「ネオテニー」を手がかりに、

成熟しつつも 1~2 割の未完の部分を残し、「別の可能性があるかもしれない」と揺さぶる姿勢を提起した。走高跳の背面跳びが当初は「失敗ジャンプ」に見えた例を通じ、既存の物差しだけで新しい可能性を閉じないことの重要性が示された。

学びを続ける力

講演の結びでは、同じことを反復する中にも試行錯誤を見出し、「楽しいことをする」のではなく「やっていることを楽しむ」ことが学び続ける力になると語られた。明るく、楽観的に、対象を面白がる雰囲気をつくる指導者の存在が、自律的な学びを促すとの示唆が得られた。

3. クロストーク・質疑応答

「型」は自動化と構造理解の土台

梶氏からは、大学事務職員の育成において共通の「型」をどう見いだすかが問われた。為末氏は、型を「あまり考えなくても自動的にできる状態」と捉え、一定期間は反復によって身につけることが必要と回答した。同時に、型やマニュアルを自分たちで作るプロセスそのものが仕事の構造理解を深めること、仕事を整理する短い言葉の枠組みを持つことの有用性が語られた。

関係性がメタ認知を支える

西城氏から、医療者が患者・学習者への関心や好奇心を保つにはどうすればよいかが問われた。医療では共感しすぎれば疲弊し、距離を取りすぎれば対象を物のように扱う危険があるという難しさを踏まえつつ、長期間関係を続けられる相手を持つことの意義が示された。関係が深いからこそ、自分では気づきにくい癖に踏み込むフィードバックが可能になり、それがメタ認知に大きな影響を与えると考えられた。

長期的な学びの動機と「何のためか」

会場からは、若い医師が 30～40 年にわたり学び続けるため、初期段階でどのように動機づけるかという質問があった。為末氏は、最初から理想的な動機だけを求めず、個人的・外発的な動機から始まることも認めつつ、途中で社会課題に触れ、公共性へと動機が転換する契機を用意することを提案した。また、手段が目的化しないよう、最終的なアウトカムや「そもそも何のために行うのか」と往還することの重要性が改めて示された。

総括

本セミナーは、スポーツにおける熟達の経

験知を医療者教育の課題と接続し、熟達を「技能の獲得」に閉じず、人格、身体性、関係性、言葉、専門性横断、アンラーンまで含むプロセスとして捉え直す機会となった。特に、AI 時代において身体をもって場に居合わせること、相手の世界に届く言葉を磨くこと、長期的な関係の中でメタ認知を支えること、既存の型を持ちながらも未熟さと余白を残すことは、医療者教育・FD/SD の双方に通じる重要な示唆である。教育を過度に管理・言語化するのではなく、学習者が自ら面白がり、試行錯誤し、熟達の喜びを他者と分かち合える環境をどう支えるかという問いを参加者と共有して閉会した。

スケジュール（録画文字起こしに基づく概略）

6 月 6 日（土）	
13:00	オープニング・為末 大 氏紹介
13:05-13:40	基調講演
13:40	クロストーク：為末 大 氏 × 西城卓也 × 梶 晃太郎（司会：宮地由佳）
13:55	会場質疑応答
14:05-14:30	まとめ・個別質疑応答